

日本語と人称

富田 信一

1. 日本語の発話の基本型

日本語はヨーロッパ諸語と異なって動詞が人称による変化をしない。そこで、日本語における人称関係とはどのようなものになるのか其の原型（prototype）を「謡曲本」の中に探ってみようとするのが本論文の目指すところである。早速、次の問答から検討を始める。

発話者シテ尉「なうなうあれなる御僧に申すべき事の候。

発話者ワキ旅僧「こなたの事候か何事にて候ぞ。

発話者シテ尉「陸奥へお下り候はば外の浜にては獺師にて候者の、こそこの春の比身まかりて候。其妻子の屋をお尋ね候ひて、それに候みのかさ手向けてくれよと仰せ候へ。

(烏頭)

Shite:

Hola ! Ho ! Je voudrais parler au Révérend Moine là-bas !

Waki:

De quoi s'agit-il donc ?

Shite:

Si vous descendez en Michinoku je voudrais vous confier un message. Je suis un chasseur du rivage de Soto, trépassé à l'automne de l'an passé. Veuillez, je vous prie, vous rendre au logis de mon épouse et de mon fils, et leur dire qu'ils fassent offrande d'un manteau de pluie et d'un chapeau qui s'y trouvent.

殺生の罪深くして立山地獄に墮ちた陸奥外の浜の獺師の霊（シテ尉）が、折柄立山禪定を

終えて陸奥へ下るワキ旅僧を呼び止めて、故郷に残した妻子への伝言を依頼する。先ず、旅僧を呼び止める発話「御僧に申すべき事の候」で「申すべき事」のあるのは発話者シテ尉である。しかし、その指示はない。一方、フランス語訳を見ると《Je voudrais parler au Révérend Moine là-bas!》とあって、《je》が「発話の主体」(sujet de l'énoncé)である。ということは此の発話の主人公は《je》であって、《Je voudrais parler au Révérend Moine là-bas!》という発話は発話者から独立していて、発話者自身が此の発話に立ち入ることはない。たまたま上記の問答では発話者シテ尉=《je》の関係にあるというだけのことである。《je》は発話者から独立している「語」であって、この発話の「発話の主体」であり、上記の問答の中で、たまたま発話者シテ尉=《je》の関係に置かれただけのことである。

ところが、日本語の発話「御僧に申すべき事の候。」においては、上記のフランス語の発話の《je》に相当する「発話の主体」の指示が見当たらない。そして発話者が「御僧に申すべき事の候」と言えば、「申すべき事」があるのは発話者であるということになるのが日本語の常である。即ち、フランス語の発話において、「発話の主体」=《je》に相当する役割を果たしているのが発話者シテ尉である。更に、発話者は発話の中に入り込んで「申すべき事の候。」に結び付き、其の発話の主人となり、発話を「身」の中に包含してしまう。即ち、発話は発話者の中で展開され、発話は発話者から独立しない。また、「御僧に申すべき事の候。」の「御僧」という敬語も発話者が話相手である「旅僧」を対象として使ったもので、この「旅僧」は発話者によって発話の中に想定された存在で実在のワキ旅僧とは別である。このように、日本語では発話が発話者の「身」の中に包含されてしまうので、発話の中に想定された存在と実在する存在との二重の存在関係が生ずる。

例えば、発話者シテ尉が話相手ワキ旅僧を前に置いてする発話、「陸奥へお下り候はば」で、「お下り」という敬語を使う発話者は発話の中でワキ旅僧をその対象として想定する。発話者が発話の中で想定した旅僧は発話者の観念のなかにだけ存在する。この段階では、発話者が発話の中に想定した旅僧と実在の旅僧とは二重の存在となっているが、やがて問答を続けるうちに、発話の中に想定された存在が実在する者により修正されることが期待される。一方、フランス語訳を見ると、《Si vous descendez en Michinoku》とあって、「発話の主体」の《vous》が指示され、発話は発話者から独立し、vous=ワキ旅僧を前提として発話されている。もう一度日本語に戻ると、「お下り候はば」の敬語の対象とされた旅僧は発話者の「身」の中に留まっていて、発話も勿論、発話者から独立せず、発話者の中に想定された旅僧と、実在の旅僧とは二重の存在となる。話を先に進める、「外の浜にては獵師にて候者の、こぞの春の比身まかりて候。」においては「候者の」「身まかりて候」で発話者が発話の中に入り込むので発話が発話者から完全に独立しているとは言えないが、「獵師にて候者」が「発話の主体」となり、「身まかりて候」までは発話者から独立した発話。此の娑婆で暮した獵師

も発話者とは別の独立した存在で、発話者シテ「獵師の霊」と二重の存在関係を作る。然し、《Je suis un chasseur du rivage de Sôtô, trépassé à l'automne de l'an passé.》では、発話者＝《je》＝un chasseurとなつて、娑婆で殺生に励む外の浜の獵師と、死んで立山地獄に堕ちて苦しむ獵師の霊との二重の存在関係は成立しない。「発話の主体」《je》が二重の存在関係を解消するのである。

扱、「其妻子の屋をお尋ね候ひて、それに候みのかさ手向けてくれよと仰せ候へ。」の敬語「お尋ね」「仰せ」の対象者は旅僧、発話者シテ尉が発話の中に想定した旅僧は、愈々外の浜の獵師の妻子の家を尋ねる。実在の旅僧にとっては見ず知らずの人獵師の妻子も、発話者獵師の霊にとっては身近な人。其妻子に家に置いてある蓑笠を手向けるようにと伝言する。ここまで、発話者が発話の中で想定した旅僧は実在の旅僧には構わず、発話者シテ尉の観念の中で勝手な行動を取る。然し、今度はワキ旅僧が発話者となり、シテ尉が勝手に想定した旅僧の行動を修正することとなる。

発話者ワキ旅僧「是は思ひもよらぬ事を仰せ候物かな。届け申さん事は安きほどの事にて候去ながら、うはの空に申してはやはか御承引候べき。

(烏頭)

Waki:

Que voilà une requête imprévue ! La transmettre certes est chose aisée, cependant si je parle sans preuve, comment pourrait-on croire ?

まず、「是は思ひもよらぬ事を仰せ候物かな。」という発話者ワキ僧の発話で「是は」は話相手シテ尉の一方的とも思える依頼を、今度は発話者ワキ僧が自分の発話の状況の中に置いて、その是非はともかくも取敢えず「是は」と提示した。今日風の言い方ならば、「これはこれはどうも…」ぐらいに当ろうか。「思ひもよらぬ事」は、発話に発話者が入り込んで、発話者が思いも寄らぬ事の意。これに対して、《une requête imprévue》の《imprévu》は《une requête》を修飾する形容詞、発話者から独立している語であつてここにまで発話者が入り込む事はない。このように日本語においては「思ひもよらぬこと」に発話者が直接結び付いて、発話者が思いも寄らぬという意になる発話の形式がその基本である。「仰せ候物かな。」という敬語の対象者はシテ尉、あたかも其シテ尉が「言う」かのように、即ちシテ尉が「仰せ」の「発話の主体」であるかのように見えるが、これは発話者が自己を「無」にし「相手」を頭揚する敬語「仰せ」の働きの結果によるもので、実は、発話者ワキ僧が話相手のシテ尉を敬語の対象者として想定し「仰せ」という敬語を使っているので、「発話の主体」は発話者の

側にある。従って 発話者＝「発話の主体」と考えられ、これを①形式の発話で表すと、通常、日本語では「発話の主体」の指示をしないのでこれを－0で表すと、①－0形式の発話が、通常日本語の発話の基本の形式ということになろう。以下この①－0形式の発話を基本に置いて説明を進めることとする。

「届け申さん事は」も①－0形式の発話、発話者が直接発話の中に入り込んで発話者が「届け申さん事」となる。「安きほどの事にて候」と判断するのも発話者、「去ながら上の空に申しては」も発話者が獵師の伝言を只そのまま獵師の妻子に伝えたとしても、「やはか御承引候べき。」の敬語「御承引」の対象者は獵師の妻子、発話者旅僧にとっては見ず知らずの人だから、どのように話したのか戸惑う。地獄に墮ちた獵師の伝言であると信じて貰えるだけの「証」がなくてはワキ旅僧は結論する。ここまで全て、発話者ワキ僧の①－0形式の発話。シテ獵師の霊が旅僧を対象に想定した依頼を、発話者ワキ旅僧が発話者の立場に立って検証した結果は「上の空に申してはやはか御承引候べき。」である。敬語「御承引」の対象者が発話者にとっては見ず知らずの他人である事に注意する。発話者は敬語を使用することで、その敬語の対象者として、話相手（二人称）でも、其ほかの他人（三人称）でも想定できる。又、「発話の主体」の指示のない発話ではどんな「発話の主体」を其の中に想定することも可能となる。とは言え、日本語においても「発話の主体」を指示する発話の形式も存在する。例えば、

発話者シテ増尾の太郎種直（従者に向って）「いかに汝はこれより古里へ帰り老母に申すべきやうは、種直やがてかへるべきとは申して候へども、春栄が最期餘にみ捨てがたく候ひて、……」
（春栄）

発話者増尾の太郎種直は伝言を託す従者を「汝」、伝言の受取人を「老母」、自分自身を「種直」、また、みづからの弟は「春栄」と指示して四人を区別する。しかし、発話の基本は①－0形式にあるのだから、普通は、話相手に対しても、また、第三者に対しても敬語を使うことで「発話の主体」の指示をせず済みます。この場合、発話者は敬語の対象者を発話の中に想定することになるので、実在する対象との間に二重構造の関係が生れる結果になる。

発話者シテ尉「げにたしかなるしるしなくては。や。思ひ出でたりありし世の、今はの時まで此尉がきその麻ぎぬの袖をとき、

発話者同音「是をしるしにと、涙をそへて旅ごろも、涙をそへて旅ごろも、立ちわかれゆく

其跡は、雲やけふりのたて山の、木のめももゆるはるばると、客僧は奥へくだれば、亡者はなくななくみ送りて、行方しらず成りにけり、行方しらず成りにけり。

(鳥頭)

Shité:

En vérité, à défaut de preuve certaine, sans effet sera le discours ! Ah, j'y pense ! il est un vêtement que dans le monde des vivants jusqu'à l'heure ultime je portais

et de sa robe de chanvre de Kiso

la manche il détache

(Il détache sa manche gauche.)

Coeur:

ceci en signe de reconnaissance dit-il

et couverte de larmes lui donne en robe de voyage

et couverte de larmes lui donne en robe de voyage

(Le waki le rejoint sur le pont et prend la manche.)

le quitte et s'éloigne et derrière lui

nuage et fumée s'élève au Mont Taté

les bourgeons des arbres éclatent au printemps au loin

vers les provinces extremes s'en va le moine errant

et le défunt pleurant et pleurant le suit des yeux

puis sans laisser de trace il disparaît

puis sans laisser de trace il disparaît

(Le waki revient sur le plateau. Le shité le regarde partir, pleure, puis quitte la scene. Le waki revient au nanori-za.)

見ず知らずの獵師の妻子に絵空言のような伝言をしたところで「やはか御承引候べき。」という旅僧の危惧を、代って発話者となったシテ尉は我が身の事と受とめ、自分と妻子とを結ぶ証しを求めて身边を顧みる。「げに確かなるしるしなくては」ふと、シテ尉獵師の「霊」に外の浜での生前の生活がよみがえる。そこで娑婆で生きた「獵師」を「此尉」と指示する。

即ち、「思ひ出でたりありし世の」の「思ひ出でたり」は今、発話者シテ尉獵師の霊が外の浜での生活を思い起す①-0形式の基本発話。ところが「今はの時まで此尉が着」の「此尉」は「発話の主体」の指示である。そこで此の発話は発話者シテ尉から独立する。もちろん「此尉」も発話者から独立した存在となり、発話者シテ尉とは別に娑婆に暮していた当時の獵師が想起される。是は発話の中で想定された存在であり、一方発話者獵師の霊は実在するのだから両者は二重構造を形成する。但し、「此尉」の「この」が想定された存在「外の浜の獵師」を発話者の身近に引き寄せる働きをしている。同様の例。

発話者ワキ渡し守「此人ならばぬ旅のつかれにや、路次より以外に違例し,...」(墨田川)
 発話者狂言野上の宿の長者「其後は此人この扇にのみながめ入りて,...」(斑女)

「墨田川」の発話者ワキ渡し守は「語り」の中に想定した主人公梅若丸を「此人」と指示し、又、「斑女」の発話者狂言野上の宿の長者は宿の女で扇をさばくり一向に客を取らぬ「斑女」を「此人」と呼ぶ。どちらも「語り」の中で想定された存在、発話者に引き寄せる為に「此」と指示する。今、立山地獄にいる発話者シテ獵師の霊は、生前、陸奥外の浜で獵師として殺生に明け暮れた「我」を「此尉」と呼ぶ。発話者によって想定された存在。発話者は自己の発話中の人物にするため「此」と指示するが、「此尉」は遠く外の浜にいて、時間も距離も発話者からは離れた存在である。シテ尉獵師の霊が今、発話行為をしている実在の発話者であるのに対して、「此尉」の方はその発話者によって発話の中に想定された存在である。しかも、「今はの時まで此尉が着」と「此尉」は「発話の主体」の指示に使われている。通常、①-0形式の発話を基本とする日本語にあって、尚「発話の主体」を指示することは其の存在を顕示する結果を伴う。即ち、「此尉」は、今実在して発話行為をしている発話者シテ尉獵師の霊とは別の、娑婆はみちのく外の浜で殺生に勤しむ獵師であることを指示して、実在する発話者との二重構造を明確にする。一方フランス語訳は、《 dans le monde des vivants jusqu'à l'heure ultime je portais 》と 発話者=《 je 》=獵師 を守っている。「発話の主体」の《 je 》が発話者と外の浜の獵師とを一体にまとめるから、日本語のように発話者シテ尉と「此尉」との二重構造は作らない。かくして、外の浜で獵師をしていた「此尉」が「今はの時まで着」ていた「木曾の麻衣の袖をとぎ」と続くが「此尉が今はの時まで着」が「木曾」に転換するとき、即ち、「此尉が...着」という「此尉」の行為が「木曾の麻衣」という名詞の中に吸収されるとき、発話者の発話の中から「発話の主体」である「此尉」も消滅する。そこで「木曾の麻衣の袖を解き」の「発話の主体」が空白となり、発話者シテ尉獵師の霊だけが残っている状況となる。日本語では常に、発話者=「発話の主体」が原則であるから、この状況においては、誰が「発話者」になっても構わぬのだが、一般的な名詞になった

とはいえ「木曾の麻衣」には「此尉」の名残があって発話者獵師の霊が「此尉」に代って直ちに「木曾の麻衣の袖を解き」の中に入って行きにくい状態にある。しかし、発話のなかに想定された存在の「此尉」が消え去っても実在の「獵師の霊」だけは残っている。即ち、実在する獵師の霊は「木曾の麻衣の袖を解く」動作はするが、発話者が不在である。そこで、これまでの発話者シテ尉獵師の霊に代って「是をしるしにと、涙をそへて旅ごろも」以下の発話をする新しい発話者が必要とされる。これが発話者「同音」であって、此の発話者は其の発話の中で「発話の主体」に「シテ獵師の霊」を想定し、基本的には①-0形式の発話をする。即ち、「是をしるしにと、涙をそへてたび衣」をするのは「獵師の霊」である。然し、発話者は「獵師の霊」ではないのだから、これまでのように発話者獵師の霊が自己中心の発話をするのとは異なる。実在するシテ尉獵師の霊を目前に置いて、シテ尉、ワキ旅僧、春の立山地獄という「発話の状況」の中に一存在として置かれているシテ尉を外から見る視点で発話する。これ迄の発話者シテ尉の発話が発話者の自己を世の中心に置いて内から外へ向かう視点の発話であったとすると、正しく視点の転換といえる。

発話者「同音」の発話はシテ獵師の霊が引ちぎった左の袖を旅僧に渡し、旅僧はそれを懐に納め一路みちのく外の浜へ向う、獵師の霊は泣く泣く旅僧を見送って立山地獄に残るという状況を客観的に眺める立場で叙述する。「涙をそへて旅ごろも」の発話ではシテ尉獵師の霊が「涙をそへて賜び衣」なのだが、発話が目前に実在するシテ尉に結び付くのを避ける意図で「賜び」を「旅衣」に転換する。発話者「同音」の発話は「涙を添へて旅衣」の指示されていない「発話の主体」が獵師の霊であることを示唆すれば足りるのであって、「シテ尉獵師の霊」は発話者「同音」の目前に実在するのだから、発話が是と直接結び付くのを避けることは発話の客観性を保つうえで必要な配慮となる。こうすることで実在するシテ尉と「是をしるしにと、涙をそへて旅衣」という発話との二重構造が形成されることとなる。次は、「立ち別れゆく其跡は」でも①-0形式の発話であるから前の発話者と同じく「発話の主体」の指示がなく、従って、シテ尉が「立ち別れゆく」のか、それともワキ旅僧が「立ち別れゆく」のか判然としないが、ここで「発話の主体」が代るのであれば当然その指示があつて然るべきである。そこでシテ尉がワキ旅僧と別れた其の跡はということになり、跡に残った「シテ尉」が「雲や煙の立山の、木の芽も萌ゆるはるばると」春の立山地獄谷に立って、「客僧」がみちのく外の浜に下って行くのを見送る。ここで発話の中での「旅僧」の指示が「客僧」に代り、「獵師の霊」の指示は「亡者」とより客観的となる。発話が実在するシテ尉、ワキ旅僧から離れた位置で眺めたものとなり、やがて「亡者」は雲と煙の立山地獄のいずこへか「行方知らず」となって中入りする。

扱、発話者「同音」が「シテ獵師の霊」を「発話の主体」に想定して「立ち別れゆく其跡は、」の発話をするとしたが、シテ尉と発話との結び付きは淡い。既に「是をしるしにと旅衣」

の「旅衣」で両者の結び付きは途絶えようとしていた。しかし、「雲や煙の立山の、木の芽も萌ゆる遙々と、客僧は奥へ下れば」において、立山の雲、地獄谷の煙、谷の木々の芽の緑に、それを見るシテ尉を想定した方が叙述に生気がよみがえり、「遥ばると」も山の上に立って遙かに緑の谷を下って行く旅僧の姿を見送るシテ尉を置いた方が発話が生きてくる。但し、その発話と実在するシテ尉とは関連が示唆されれば十分で、発話がシテ尉に立ち入れば蛇足となり真実さを失う。「亡者は泣く泣く見送りて、行方知らずなりにけり。」と「亡者」が「発話の主体」となって発話が発話者「同音」から独立する時、発話と実在するシテ尉との二重の存在関係ももちろん消滅する。発話者が発話の中でシテ尉を想定し「立ち別れゆく」と発話し、シテ尉は橋掛一の松で正面に直し、右へクツロギ、出る。「雲や煙の立山の」で、シテはワキの方を見て出、遠く見る。発話は「発話の主体」獵師の霊の説明に墮さず、シテ尉は発話の語句を追う動きはしない。発話者「同音」の発話は①-0、その「発話の主体」の役をシテ尉はそこに居て僅かに仕舞するだけで十分に果たす。シテ尉はそこに居るだけで発話者「同音」の「発話の主体」であることを示す。余計な動きは発話を損なう。

フランス語訳について見ると、「今はの時まで此尉が」*jusqu'à l'heure ultime je portais*において「此尉」→《*je portais*》となっていることについては既に触れた通り、此の発話の発話者シテ尉獵師の霊と「発話の主体」＝「此尉」（娑婆の獵師）との二重構造が《*je*》で一体化されている。しかし、「此尉が木曾の麻衣」のところで「此尉」が「きそ」に吸収され消滅してしまった時点、又「今はの時まで此尉が」から「和音上」の「節」が付く時点で、発話者シテ尉は「発話の主体」を《*je*》から《*il*》にかえる。《*et de sa robe de chanvre de Kiso / la manche il détache*》「此尉が木曾の麻衣の袖をとき」で、《*il*》は発話者シテ尉とは無関係の他者である。発話者が「同音」（Choeur）に代っても《*il*》は発話者とは無関係の客体でそれを第三者として眺める対象でしかない。例えば、「鉢の木」で発話者佐野弾正左衛門常世は雪の中で難儀をしているワキ最明寺入道を眺め、これを《*il*》と指示する。

Shité:

... Par la neige qui tout à l'heure tombait, il ne distinguait plus sa route ; par la neige qui tombe à cette heure, il a perdu son chemin, et se tient là, de sa manche secouant la neige ; de le voir secouant sa manche

発話者佐野常世「... もとふる雪に道を忘れ、今ふる雪に前後を亡じて、袖なる雪をうち払ひうち払ひたたずみ給ふをみて、...

(鉢木)

発話者佐野某にとってワキ最明寺入道は雪原のかなたに居る存在で《il》と指示した。同様に、「烏頭」の発話者シテ尉も自分と無縁の離れた存在とみて《il détache》と《il》と指示する。即ち、発話者と「発話の主体」の《il》とは全く無縁の他人である。ところが、日本語の場合発話者佐野某の「... 道を忘れ、前後を亡じて、雪をうち払ひ」する人は発話者佐野某であっても、ワキ最明寺入道であっても同じ発話の形である。また、敬語「たたずみ給ふ」の対象がワキ最明寺入道であることで此の発話がワキ対象の発話であることが知れるが、此の敬語を使用しているのは発話者であるから、敬語の対象者ワキ最明寺入道は発話者佐野某によって想定された存在である。即ち、ワキ最明寺入道＝《il》は発話者佐野某の発話の中に留まって発話者から独立した存在とはならない。これと同様なことが発話者「同音」の発話についても言える。話を「烏頭」に戻して、発話者「同音」の発話「是をしるしにと、涙をそへて旅衣」の「発話の主体」は「獵師の霊」＝《il》であるが其れは発話者によって発話の中で想定された存在であって、発話者は自分の「身」の内にある「発話の主体」＝「獵師の霊」を「我」と呼ぶことができる。

発話者「同音」「我はそとの浜千鳥、ねにたてて、なくよりほかのことぞなき。(烏頭)

Chœur:

moi qui suis dehors pluvier du rivage de Soto
si ce n'est élever la voix et pleurer plus rien ne puis

この同じ発話を実在するシテ尉獵師の霊も自分が発話者となって①-0形式の発話をすることができ、その時は発話中の「我」は発話者シテ尉自身のことになることも明らかである。然し目下の所発話者は「同音」であるから、実在する「シテ尉獵師の霊」は発話を「我」のこととして聞き、「シオル」仕舞をするだけである。ここに発話者「同音」によって想定された「獵師の霊」と、実在するシテ尉獵師の霊との二重の存在関係が形成される。即ち、①-0の発話にあっては、発話者が発話と結び付き発話者が発話を包含してしまうのが常であるから、発話を発話者から切り放して其客観性を保つ為には、発話自体に客観性を持たせて発話者と結び付くのを避けるか、発話者を代え、発話との結び付きを避けるかであるが、先ず、前者について検討する。

発話者シテ増尾の太郎種直「(次第) ちらぬさきにと尋ねゆく、花をやかぜの誘ふらん。(詞)
是は増尾の太郎種直にて候。扱も宇治はしの西のつめにて弓手の肩をいさせ、其矢をぬかんとすこし引退きしまに、弟にて候

春栄を見失ひて候程に、さては討たれたるかと思ひ候へば、めしうどと成りかまくらへ下る由承り候程に、まさしき兄弟の事にて候を、見捨てたるやうに思はんこと口惜しう候へば、急ぎ追つつめ囚人の数に入らばやと思ひ定め、ただ今鎌倉へ下り候。
 (道行) 住みなれし、都の空は雲井にて、都の空は雲井にて、あさだつ空の旅ごろも、日も重なりてゆく程に、名にのみ聞きし、伊豆の国府、三嶋に早く着きにけり、みしまに早く付きにけり。

(春栄)

一応、「発話の状況」の説明をすると、発話者シテ増尾の太郎種直は、元弘の変宇治橋西の詰め戦で囚人となった弟春栄の後を追って鎌倉へ下る。上掲の発話は全て発話者シテ増尾の太郎の①-0の発話と見ることができるが、先ず「次第」の発話から検討を始める。「散らぬ先にと尋ね行く、」のは普通「発話者自身」ということになろう。発話者が直接「尋ね行く」と結び付く①-0の発話と考えるからである。シテ増尾の太郎が尋ねゆくのであれば、「花を」は弟春栄に「散る」を「春栄の死」に「風」を何か死を誘う出来事にと、「花、風」に一々「春栄」を仮託する傾向に拍車をかけることも可能である。しかし、「春栄」を度外視し、主題を「花と風」に限定して「散る前にと花を尋ねて行くが、風が其の花を散らしてしまうことであろう。」とすれば、人の世の煩しさも消え奥床しくもある。発話が発話者と結び付かぬようにするには、発話の客観性を増すことも一方法である。発話者が「尋ねゆく」だけで発話者は発話を独占してしまう恐れが十分にある。

1. 発話者シテ増尾太郎「散らぬ先にと尋ねゆく、花をや風の誘ふらん。」発話者の①-0の発話
2. 発話者ワキ高橋家次「散らぬ先にと尋ねゆく、花をや風の誘ふらん。」発話者の②-0の発話

「発話の状況」の設定を、1の場合、上掲の「春栄」の場合と同様、発話者増尾某が弟春栄の後を追って鎌倉へ下るところとする。発話者増尾某が散らぬ先にと花を尋ねて行くことになる。花と春栄を結付ける度合はこの発話を聞く者の判断に任せる。2の「発話の状況」は1の状況に発話者ワキ高橋某が加わって、発話者ワキ高橋某がシテ増尾某を目前に置いてこれについて発話すると設定すれば、「発話の主体」は増尾の太郎となり、発話者≠「発話の主体」・②、「発話の主体」の指示なし-0、そこでこれを②-0の発話とする。発話者高橋

某は増尾の太郎が弟春栄の後を追ひ鎌倉へ下るのをみて「散らぬ先にと尋ねて行くが風が花を散らしてしまうかもしれない。」という意の発話をする事となる。1の場合発話者増尾の太郎が世の中の中心に居て、内から外へ視点を向けて発話する。2の場合は「発話の主体」の増尾を発話者高橋が外から内へ向けての視点で発話する。また2の場合に発話者を限定しない場合には、外から内への視点で「発話の主体」=増尾の太郎の発話をする発話者「同音」を設定することも可能である。この場合には実在する増尾の太郎と、発話者が発話の中に想定する増尾の太郎との二重構造が形成される。しかし、目下のところは1の場合に限定されていて、増尾の太郎は①-0の発話をしているのだが、この発話をそのまま②-0の発話に転換できる可能性を持つ。これが「次第」の特色で発話者と発話とを引き離すための一つの手段として使われる。

発話者がその発話と結び付かぬようにするためには、ヨーロッパ諸語と同じく「発話の主体」を指示する方法もある。「発話の主体」の指示があると其の発話は発話者から独立する。

発話者シテ尉実盛の霊「我さねもりの幽霊なるが、魂は冥途に有りながら、魄は此よにとどまりて、

(実盛)

発話者シテ小野の小町「迎ふしたるこの卒塔婆、我もやすむは苦しいか。

(卒都婆小町)

発話者シテ主馬判官盛久「盛久やがて座に直り、清水のかたはそなたぞと、...

(盛久)

発話者シテ自然居士「さらば居士大津松本とかやへゆき此小袖を返し、今のをさなき人を乞うて見候べし、...

(自然居士)

発話者ワキ羽黒山の山伏「我此山に嶺入りし、度々かよひし道なれども、にはかに降りくる雪のふぶきに、...

(葛城)

発話者ワキ平の維茂「維茂すこしも、騒がずして、

(紅葉狩)

日本語の発話では普通「発話の主体」の指示をしないから、その指示があるのは其れなりの理由がある。例えば既に引用した「春栄」の場合には発話者増尾の太郎はその従者「汝」に「老母」への伝言を委託するのに、自身のことは「種直」、弟は「春栄」と指示して、「従者」「母」と四人の人物を区別する。ここでは四人を区別するために「発話の主体」の指示を

する必要があった。即ち、①-0の発話では、発話は発話者の「身」の中に包含されてしまうので他者を発話の中に想定することは容易であっても、其の他者の数が増えた場合、それらを列挙することはできても、互いの関係まで立ち入って明確に説明することが困難になる。其の場合は夫々の他者を「発話の主体」として指示してしまえば、夫々の人物が各自独立することになるので、互いの関連を明確に説明できる状況となる。しかし、上掲の諸例の場合にはこれと異なる。先ず、発話者が其の発話の中で自分自身を「我」と指示する場合は、「我」は発話者から独立して発話者を取り巻いている外界に居る一存在となる。普通の①-0の発話者にあつては「我」は其指示なしに発話者の「身」の中に納まってたとえ「身」一杯に充滿していても「身」の外に出ることはなかった。しかし一度「我」と指示されて世の中の一存在となれば、発話者は自己を客体化するだけでなく、自己を顕在させて見せることにもなる。「実盛」の幽霊は自己を顕示して「魂は冥途に有りながら、魄はこのよにとどまりて」と此の世に存在していることを顕示する。発話者「小野の小町」も卒塔婆の上に腰を下して高野山の僧に「我」の存在を顕示する。

発話者シテ尉悪七兵衛景清「今まではつつみかくすと思ひしに、頭はれけるか露の身の、置き所なや恥かしや。御身は花の姿にて、親子と名乗りたまふならば、殊我名も頭はるべしと、思ひきりつつうちぞす。我をうらみと思ふなよ。

(景清)

景清は世を憚って藁屋にこもる。藁屋はまさしく景清にとって「身」の象徴であった。景清が藁屋の外に出ることは世の中の一存在としての「我」を世の中に顕示することになる。「我」は発話者の「身」の外に置かれた存在で、「我をうらみと思ふなよ」の「我」は発話者景清が今は落ちぶれ果てて「日向の勾当」となった「我」を客体として指示する語である。従って、この「我」は発話者景清から独立した存在となっているから、景清の事情を知っている景清以外の者が発話者となって「我」と指示することも可能である。例えば、発話者「同音」の「やつれ果てたる有様を、我だにうしと思ふ身を、」の「我」は発話者から独立した景清の「我」がその「身」を振り返る。

発話者「同音」「しやばにては、うとう安かたと見えしも、冥途にしては化鳥となり、罪人を追つたてくろがねの、はしをならし羽をたたき、赤がねの爪をとぎたてては、まなこをつかんでしむらを、さけばんとすれども猛火の煙に、むせんで声をあげえぬは、をしどりを殺しし科やらん。にげんとすれど立ちえぬは、は

ぬけ鳥の酬か、

発話者シテ獵師の靈「うとうは、かへつて鷹となり、

発話者「同音」「我は雉とぞ成りたりける。...

娑婆にては烏頭安方と見ていたのは獵師であり、その烏頭が冥途では化鳥となって責めてくる、叫ぼうとするが猛火の煙にむせんで声が出ず、これはおし鳥を殺した酬いであろうと考えるのも獵師である。逃げようとしても立てず、これは羽ぬけ鳥の酬いと考えるのも、獵師である。従って、ここまでの発話者「同音」の発話の「発話の主体」は獵師で、発話者「同音」≠「発話の主体」獵師の靈とみれば発話者「同音」の②-0の発話となるのだが、例えば「むせんで声をあげぬ」のは獵師の靈であって、「むせんで声をあげぬは、をしどりを殺しし科やらん。」という発話はそのまますっきり発話者「獵師の靈」の①-0の発話とすることも可能である。即ち、「しやばにては、うとう安かたと見えしも、」から始まる発話者「同音」の発話を全てそっくりそのままの形で発話者「シテ獵師の靈」の①-0の発話とすることも可能である。両者の相違は、発話者シテ「獵師の靈」の①-0の発話の場合には発話者「獵師の靈」が自己を中心に置いて「冥途」を見ているのに対して、発話者「同音」の発話は「冥途にいる獵師の靈」を外から眺めている発話で、視点の転換が行なわれる点にある。また、発話者「同音」が「しやばにては、うとうやすかたと見えしも」以下の発話をする場合、この発話には「発話の主体」の指示がないのだから、日本語の発話の基本である①-0の発話の常として発話者「同音」は「発話の主体」である「獵師の靈」に成り代って発話を続ける。そこで、発話者「同音」が「獵師の靈」の「我」に成り代って「我は雉とぞ成りたりける。」と発話するのも当然のことである。一方、「我」＝「獵師の靈」であるから発話者を「獵師の靈」にかえて、

発話者「獵師の靈」「我は雉とぞ成りたりける。」

とすることも当然可能である。そこで次の関係が成り立つ。

発話者「同音」＝「我」＝ 発話者「獵師の靈」

この関係から、二つのことが考えられる。一つは、既に何度か触れたことだが、上記の発話者「同音」の発話のなかで想定されている「発話の主体」＝「獵師の靈」は発話の中にだけ留まっている観念上の存在であるが、これと舞台の上に実在するシテ獵師の靈とが作る二重関係である。次には発話者「同音」の実体が何かである。先ず、二重関係については発話者「同音」の「しやばにてはうとうやすかたと見えしも、...」には「発話の主体」＝「獵師の靈」の指示がないから、前述のように発話者「同音」が「獵師の靈」になり代って発話を

することになる。しかし、発話自体として「発話の主体」の指示を欠いている事実に変りはない。舞台上に実在するシテ獵師の霊はこの時自分が発話者「同音」の発話の「発話の主体」に当る存在だということを自らの「仕舞」で示すことができれば、その補完の仕事は終る。例えば、「叫ばんとすれど猛火の煙にむせんで声をあげえぬは、」のところで、シテ獵師の霊は「正先から右へ回り、指して角へ行き、裏指し回し、顔を掩い口をふさぐ型、」の仕舞をする。この時、仕舞が発話の文言の説明になることを嫌う。シテ獵師の霊はそこに実在して、発話者「同音」の発話の「発話の主体」＝「獵師の霊」に相応する存在としてそこに実在するという線に留まるのである。発話者「同音」の発話は「獵師の霊」を外から眺める②-0の発話であることを維持し、しかも其の同じ発話がシテ獵師の霊がそこに実在することで発話者シテ獵師の霊の①-0の発話にもなり得る可能性を持つという事を維持することが①-0形式の発話を基本とする日本語で現実感を構成する場合に留意すべき肝要な事柄である。

発話者シテ獵師の霊「烏頭は却って鷹となり。

発話者「同音」「我は雉とぞ成りたりける。

此の二つの発話の組み合わせを説明するに当たって、舞台上に実在するシテ獵師の霊と、発話者「同音」によって発話の中で想定された「獵師の霊」とを明確に区別するために、前者を「シテ」、後者を「獵師の霊」と呼ぶことにする。上述のように「シテ」はそこに独立して実在していることを示すことが役目で、発話者「同音」の発話には立ち入らぬことを建前とする。この（キリ）の「発話の状況」の設定も此の両者の区別を守るように作られている。即ち、発話者「同音」の実体、つまり「同音」を構成している人々を、ワキ僧、ツレ獵師の霊の妻、子方千代童の三人とし、この集団の代表にワキ僧を考えると、彼らは息をひそめて地獄の責苦に遭っている「シテ」を見守っているのだから彼らの発話の中に想定された「獵師の霊」と「シテ」とは相互に立ち入ることの出来ない位置に置かれている。先ず、発話者「シテ」が「烏頭は却って鷹となり。」と発話する。「シテ」が地獄を見ている呟きである。「シテ」の周囲には地獄の光景が展開していることを言えば、「シテ」がそこに実在していることは証明される。このほかのこと、娑婆では捕らえられ安かった愚かな鳥の「ウトウ」が地獄では鷹になって「獵師の霊」を責め立てているなどと付会するのは、「獵師の霊」を想定して発話する者がすることである。「シテ」は地獄の有様をみて呟けば其の実在は証明される。そこで「烏頭は却って鷹となり」が発話者「シテ」にとって必要十分な発話である。次に発話者「同音」の「我は雉とぞ成りたりける」についてであるが、発話者「同音」が「獵師の霊」と「我」を共有できる関係にあることは既に説明した。ここで断わっておかねばならぬことは、此の発話の中の「我」は発話者「同音」が想定した「獵師の霊」の「我」であると

いうことである。ところが、実在する「シテ」の「我」との共有を感じてしまうのは、そこに「シテ」が実在しているため、「我」が「シテ」と結びつけられてしまう効果なのである。「我は雉とぞ成りたりける。」が「シテ」の発話にふさわしいと感じてしまうのも、「シテ」と「獵師の霊」との二重の存在関係が混同を引き起こす結果である。しかし、ひるがえって考えると、発話の中で想定された「我」と実在する「シテ」とが極めて接近することによって作り出される現実感の効果も注目すべきである。

扱、この「烏頭」の（キリ）の発話者「同音」の発話は「助けてたべや御僧」というワキ旅僧への呼び掛けで終る。もちろん、「発話の主体」＝「獵師の霊」であるから、地獄の責苦に遭って苦しむシテ獵師の霊を見ているのはワキ旅僧、ツレ獵師の妻、子方獵師の子千代童の三人という事は既に述べた通りである。此の三人の発話を辿ってみると、ツレ獵師の妻の「あれはともいはば形やきえなんと、親子手にてを取りくみて、なく計なる、有様かな。」が最後に以後は沈黙を続ける。つまり、「あれは」と声を出せば、折角姿を見せてくれた「獵師の霊」が消えてしまうのではと、三人は地獄の亡者の様子を見守っているわけで、舞台の上には三人が並んで留まっている。シテ獵師の霊と獵師の妻子との仲介をするのがワキ旅僧の役目だから、ワキ旅僧に三人を代表させても差支えない。すると地獄の責苦にあえぐシテ獵師の霊を見守りながら其の様子を自らは声に出さずに心の中で「語る」のはワキ旅僧ということになり、これが「烏頭」の（キリ）の発話者「同音」の実体である。此の様に黙って見守る心のなかの「語り」を、ワキ僧の「夢」の中の「語り」に変えた例を次の「忠度」で述べるが、先ずは「烏頭」の（キリ）の始末をつけて置く。

発話者シテ獵師の霊「うとうは、かへつて鷹となり、

発話者「同音」「我は雉とぞ成りたりける。のがれがた野のかりばのふぶきに、空もおそろし
地をはしる、犬鷹にせめられて、あら心うとうやすかた、安きひまなき身の
くるしみを、助けてたべや御僧、たすけてたべや御僧と、いふかと思へばう
せにけり。

（烏頭）

発話者「同音」の「発話の主体」は勿論「獵師の霊」である。上述のように、「獵師の霊」の「我」と、発話者「同音」の「我」とは共有されている。すると「我は雉とぞ...」から「助けてたべや御僧」までそっくりそのままの形で、発話者「獵師の霊」の発話とすることも可能であるし、又この獵師の霊を見守っているワキ僧＝「同音」の発話とすることも可能である。即ち、発話者「獵師の霊」の①－0の発話ともなるし、発話者「同音」の②－0の発話ともなりうる。この様な発話の形が、発話の中に想定された「獵師の霊」と実在する「シテ」

獵師の霊との二重関係を形成するのに欠かせない要素となっている。さて、ワキ僧がシテ獵師の霊の様子を見ているのだとすれば、発話者「同音」の「助けてたべや御僧」の「御僧」はワキ旅僧を指示することとなり、舞台に「ワキ」が実在するから、ここでも二重の存在関係が成立し、「御僧」と「ワキ」とが関連して旅僧の実在感が大きく増幅される効果を生み出す。その上この「助けてたべや御僧」が二度繰り返されて「ワキ旅僧」がそこに存在することをいやが上にも訴えたあと、「助けてたべや御僧と」と「と」を添えて、今度はその「ワキ僧」が「獵師の霊」の訴えを聞く番と見るのが順当な見方と言えよう。すると、「いふかと思へばうせにけり。」とシテ獵師の霊が姿を消すのを見届けるのはワキ僧ということになる。勿論、日本語の①-0の発話は発話者を限定しないという原則に立てば、シテ獵師の霊が自ら「いふかと思へばうせにけり。」と発話して退場ということも考えられるが、それは次の「忠度」のキリ)に譲ることとする。

発話者「同音」「痛はしやあへなくも、六弥太太刀を抜きもち、終に御首をうちおとす。六弥太、ここに思ふ様、痛はしや彼人の、御死骸をみたてまつれば、其としもまだしき、長月比の薄ぐもり、ふりみふらずみ定なき、時雨ぞかよふ村紅葉の、錦のひたたれは、只よの常によもあらじ、いか様是は君達の。御中にこそあるらめと、御名ゆかしき所に、籠をみればふしぎやな。短尺を付けられたり。見れば旅宿の題を据ゑ、行き暮れて、このした陰を、宿とせば、

発話者シテ平の忠度の霊「花やこよひの、あるじならまし、

発話者「同音」「忠度とかかれたり、扱はうたがひあらしの音に、聞えし薩摩の、守にてますぞいたはしき。

(キリ) 御身この花の、陰に立ちより給ひしを、かく物語申さんとて、日を暮らしとどめし也。今は、うたがひよもあらじ。花はねにかへるなり。我跡とひてたび給へ。木陰を旅のやどとせば、花こそあるじなりけれ。

(忠度)

(カケリ)の後の「我も舟にのらんとて、」に始まる「忠度」の「語り」の途中から引用した。ワキ僧は(俊成の御内の者)である。其ワキ僧が「待謡」を謡って待つ「夢」の中で「忠度の語り」は展開される。従って、シテ平の忠度も、その合戦の相手である岡部の六弥太もワキ僧の夢の中に現れた人物で、ワキ僧自身も忠度ゆかりの桜の下に宿を借りた人、忠度から「御身」と呼ばれる人物として同じくワキ僧の夢の中に現れる。従って、発話者「同音」の実体は夢を見ている本人ワキ僧であり、夢の中に出てくる人たちは全てワキ僧＝「同音」の発話の中で想定された存在となる。但し、「シテ」と「ワキ」とは舞台の上に実在するので、

既に述べた通り、発話の中で想定された人物と実在する「シテ」「ワキ」との二重関係を形成する。

さて、発話者「同音」の「痛はしやあへなくも、」から「行き暮れて、このした陰を、宿とせば」までの「発話の主体」は岡部の六弥太である。六弥太はワキ僧の夢の中に現れ、ワキ僧の発話の中だけで想定され、これに相応する実在の人物がいないので、実在するシテ忠度が六弥太の分の仕舞まで担当することとなる。発話者「同音」の方が其の発話の中で「発話の主体」=忠度でも、「発話の主体」=六弥太でも自由に想定できるのに呼応して、実在を示すことを本来の役目とする「シテ」も又忠度の仕舞でも六弥太の仕舞でも自由に演じて、「同音」の「語り」に実在感を添えるのはpersonne（人称）にとられぬ考え方を基本とすれば当然の対応である。「一人一役」を決めこむのはpersonne（人称）の観念をもつ言語に基づく考え方であろう。但し、「忠度」では、忠度の方が主役で「シテ」は華やかな若武者の扮装をしているので、どちらかと言えば忠度が主となり、六弥太が従となるのはこれ又発話の方に順応した扱いである。かくして「シテ」の忠度は「我も舟に乗らんとて」で始まるかなり長い発話をして自ら其の存在を顕示して見せようと試みた。しかし、上述の「痛はしやあへなくも」からは「発話の主体」は岡部の六弥太で「シテ」は六弥太の仕舞をする。即ち、「シテ」は忠度の死骸のところへ行ってそれを見届け、忠度の籠つまり自分の籠から矢を抜いて其れに付いた短尺を読む。完全に一人が二人の役を演じ分けるのだが、「シテ」が本来発話者「同音」の「語り」に応じて「語り」の中で想定された人物の実在感を添えるのが役目であるとすれば、其の発話に応じてどんな人物の仕舞でもして役目を果たするのが当然である。六弥太は六弥太だけ、忠度は忠度だけとpersonne（人称）を限定するのは、発話が発話者を限定しない日本語の発想にそぐわない。ところで、六弥太が短尺に書かれた和歌を読む段となる。六弥太が、即ち発話者「同音」が発話するのは上の句「行き暮れてこのした陰を宿とせば」までで、下の句「花やこよひのあるじならまし」はシテ忠度の発話となる。この発話の組合せを考えてみる。

発話者「同音」「行き暮れてこのした陰を宿とせば、
発話者シテ忠度の霊「花やこよひのあるじならまし

上の句は発話者の①-0の発話となるから、発話者「同音」→ワキ僧→六弥太である。但し、この和歌の作者は忠度ということになっているから、厳密には六弥太+忠度ということになるだろうが、ともかく発話者が行き暮れて桜の木の下を宿と定めたわけである。「発話の主体」は発話者である。ところが下の句は「花やこよひのあるじ」とあるから、「花」が「発話の主体」となって発話は発話者から離れて独立し今度は「花」が主人に成る。この

「あるじ」の転換、主客の転倒がこの和歌の狙いである。この件については、(キリ)の発話が次のように説明している。即ち、「御身この花の、陰に立ちより給ひしを、かく物語申さんとて、日を暮らしとどめし也。」とあるように、この桜には「靈力」、「神」が宿っている。この桜が忠度ゆかりの木とすれば、シテ忠度は「神」を背負った若武者で、発話者シテ忠度は「あるじならまし」という託宣を此の和歌を読む六弥太に下すのである。六弥太の方もかしまって託宣を聞き、「扱はうたがひあらしの音に、聞えし薩摩の、守にてますぞいたはしき」と神妙である。

(キリ)の「発話の主体」は此の「神」を背負った忠度で、ワキ僧に向かって「御身」と呼び掛け、「今はうたがひよもあらじ」と自らの存在を明示し、「我跡とひてたび給へ」のあとは、前の「烏頭」の(キリ)のようにワキ僧などの力を借りずに、最後まで「発話の主体」を貫き、①-0の発話を続けて、もう一度「花こそあるじなりけれ。」と託宣を下して姿を消す。

尚、桜に神が宿る例として「西行桜」がある。

註

引用した謡曲文のテキストには、日本古典全書「謡曲集」上、中、下(朝日新聞社刊)を用いた。尚、謡曲文のフランス語訳にはRené Sieffert, Théâtre du moyen âge, Nô et Kyogen, I et II, P.O. F. (1979)を借用した。此のフランス語訳に使われたテキストと、上記の日本語テキストとは必ずしも一致しない場合があることを予めお断わり申しあげて置く。

Relations de personne dans le japonais

Shin'ichi TOMITA

Dans cette étude nous allons tenter de faire une analyse fonctionnelle des phrases du texte de Nô, à la recherche d'un prototype des relations personnelles dans le japonais. Nous citons, comme la dernière fois, des expressions du texte du Nô publié au début du dix-septième siècle.

Examinons d'abord des relations qui s'établissent entre le sujet d'énonciation et son énoncé, puisque la catégorie de la personne n'a pas qu'une dimension référentielle. D'une part, nous devons faire attention au fait qu'il y a chez nous une tendance à nous contenter de formes indifférenciées quant à la personne.

La forme (1) : Le sujet d'énonciation est identifié au sujet d'énoncé et dans le cas nous n'avons pas besoin de mettre des mots qui désignent le sujet de l'énoncé.

Shité (Morihisa)

Plutôt que de vivre ainsi plus longtemps et que d'exposer la honte à la vue de tous, ah puisse-t-on être sur l'heure frappé à mort

La forme (2) : Le sujet d'énonciation ne coïncide pas avec le sujet d'énoncé et dans le cas, nous mettons des mots qui désignent le sujet de l'énoncé, ou bien nous utilisons des formules de politesse.

Waki (un officier de Monseigneur Fusazaki)

Tant nous sommes-nous hâtés, que voici Monseigneur au rivage de Shido au pays de Sanuki parvenu.

En général, nous ne mettons pas de mots qui désignent le sujet de l'énoncé; c'est ainsi que nous pouvons prendre le même énoncé pour celui de la forme (1) aussi bien que celui de la forme (2).

Voici un poème antique de la forme (1):

Arrêtant ma monture
pour secouer ma manche il n'est d'abri aucun
au gué de Sano crépuscule de neige

Nous pouvons prendre le même poème pour celui de la forme (2):

Arrêtant sa monture
pour secouer sa manche il n'est d'abri aucun
au gué de Sano crepuscule de neige